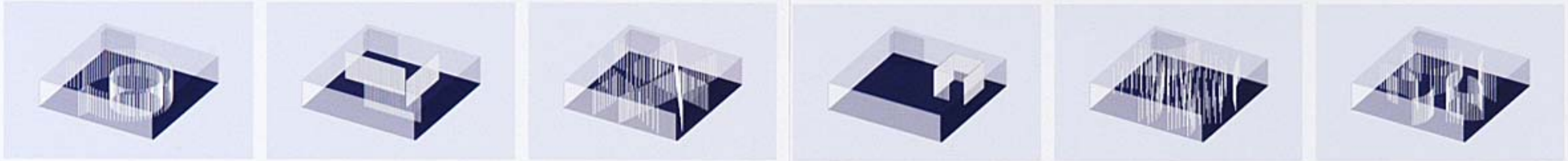
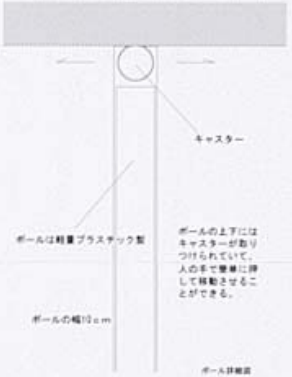


第２１回ＪＩＡ東海支部建築設計競技

境界空間、それは主に鉄や壁、棒や障子などの目に見える境界面によって空間を分けることによって発生する。しかし現代の日本の住宅は、ただでさえ狭い空間をさらに壁で区切ってやさくするのはどうかと思うし、時間が経過していく中で簡単に間取りを変えたりすることは困難で、結果として使いにくいものとなることも考えられる。ここで提案するのは目には見えない境界面をもつ空間である。人はたとえ境界面が存在していなくても、あたかもそこに境界面が存在しているかのように感じ、仮想の境界面を自分の中に作り出し空間を分けることができる。「ないもの」を「あるもの」としてとらえることは、日本人は昔から得意である。この家では数多くの可動式の縦いボールが大きなワンルームに備えつけられていて、住人はボールを自由に動かすことができる。するとその時並べられたボールによっていくつもの仮想境界面が発生し様々な居場所が作り出される。間取りを変えたければボールを再び移動させることで簡通りもの空間を達成する。この家は最終形態を持たない家である。

日本建築に見られる仮想境界面の例

これは金沢に存在する成某家の清香軒とよばれる茶室における内部空間である。左図の板戸がはずれた状況でも、敷居が残されているだけで視覚的なよりどころが与えられ、右図のような仮想境界面が発生している。この目には見えない境界面が内部と外部の空間を柔らかく分けている。



ここで提案する住宅の仮想境界面と、それによってできる居場所の考え方。

住宅内にあるボールを数本上の様に並べると、自分の周りにはボールによって弱い仮想境界面ができ自分の居場所が作り出される。ボールの密と線によって発生する仮想境界面の強さは変化する。人はこの密と線をうまく使いこなして空間を作る。

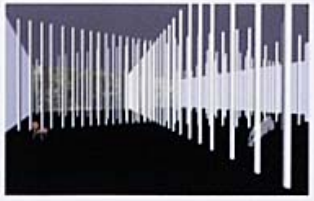
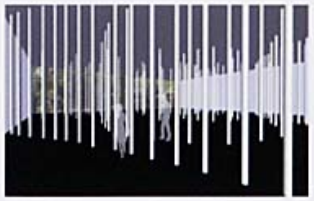
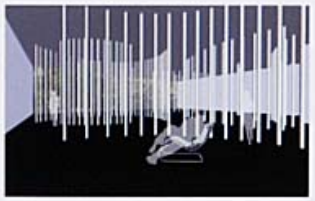
これはより多くのボールを並べた時の状態である。本数が少ない時よりも間隔が密になっているためにより強い仮想境界面が発生する。ボールの内側には弱い仮想境界面ができる時よりもプライバシー性の高い居場所が作り出される。

patern1 plan/200

patern2 plan/200

patern3 plan/200

patern4 plan/200

patern5 plan/200

patern6 plan/200